

まさやとボーノ

県立大島高等学校 二年 要 凱仁

ふなこし小中学校には、一本の大きな大きなアカギがどっしりと立っています。昼休みになると子どもたちが、だるまさんが転んだをしたり、昼寝をしたり、みんなに愛されています。アカギの木の木陰でいつも本を読んでいるのは「まさや」です。まさやは、いつも誰かに聞かせるように優しい声で本を読んでいます。まさやのそばには、こげ茶色の小さなキノボリトカゲがいて、まるでまさやの読み聞かせを聞いているかのようです。キノボリトカゲの名前は「ボーノ」。毎日、まさやとの時間を楽しみに行っている可愛いキノボリトカゲです。

校舎の玄関から小学生たちのはしゃぐ声が聞こえてきて、ボーノはアカギの根元にスタンバイしました。「まさやがそろそろ来るかな。今日はどんな本かな。」すると、

「おっ。珍しいキノボリトカゲがいるぞ。」
聞き慣れない声が響くとともに、突然、ボーノの体が宙にふわりと浮きました。人間の子どものしっぽを掴まれて持ち上げられたようです。驚いたボーノは、必死で体をじたばたさせますが、なかなか離してくれません。し

っぽがちぎれそうで、怖いやら痛いやら、悲しい気持ちになっていると、まさやの声がしました。

「かわいそうだろ。降ろしてあげなよ。」

ボーノがホツとしていると、まさやの優しい声が聞こえてきました。

「怖い目に遭わせてごめんね。」

ボーノはまだ、しっぽがひりひりしていました。いつのまにか痛みを忘れて、まさやが読む本の世界に夢中になっていました。

昼休みが終わって、まさやが校舎に帰ると、アカギのじいちゃんが声をかけてきました。

「ボーノ、さっきの子どもは転校生のりゅうとだ。九月に東京から引っ越してきたんだ。気をつけた方がいい。」
じいちゃんの言葉に、ボーノはこくんとうなずきました。

次の日の昼休み、ボーノがいつものように待っているも、まさやはなかなか来ません。心配になってちよろちよろ動いていると、急に辺りが真っ暗になりました。そのまま真っ暗な空間に包まれて、ボーノは宙に浮いているのが分かりました。「もしかして」と思うと同時に、

「よし。捕まえたぞ。」

と昨日の男の子の声がしました。「きつと、アカギのじいちゃんが言っていたりゅうとって子だ。しまった。」
と思っっているうちに、ボーノは右に左に揺られながら、

どこかに連れて行かれました。揺れがおさまったと思ったら、また別の場所に入れられました。辺りを見回すと、そこは見覚えがある場所でした。

「まさやが勉強をする教室って場所だ。」

近くにまさやがいるかもしれないと期待して、机や椅子が並ぶ場所を目指して走り出すと、

「ドン。」

と大きな音がして、ポーノは何かにぶつかり、転んでしまいました。おかしいなと思ってもう一度前に進みますが、前に進めません。

「何度やっても無理だよ。ここは水槽。透明な檻の中なんだ。」

声をする方を振り向くと、そこにはバツタとカマキリとチョウチョがいました。

「君が来る少し前から僕たちはここに閉じ込められているんだ。何をやっても無駄だよ。逃げられやしないさ。」

うつむきながらバツタが言いました。チョウチョやカマキリも悲しそうな顔をしています。

「そんな……。」

バツタの言葉にポーノは途方に暮れました。

どれくらい時間が経ったでしょうか。子どもたちや先生の声も聞こえなくなり、静かで真つ暗な夜が訪れま

した。

「家に帰りたい。家族に会いたい。」

チョウチョがぼつんと言いました。ポーノもカマキリもうなずきました。みんな同じ気持ちなのです。

「人間は自分勝手だよな。僕たちだって家族がいるのに、こんなところに閉じ込めて、自分だけ家族に甘えて、おいしいものを食べて。」

カマキリはイライラしながら鎌を振り回しています。バツタもチョウチョも思い思いに人間の悪口を言いました。でもポーノだけはただ黙っていました。頭の中では、読み聞かせをしてくれる時のまさやの優しい声がずっと響いています。「逃げたい」という気持ちより「まさやに会いたい」という気持ちの方が強かったです。ポーノは「よし」と思い、立つと、バツタたちに言いました。

「ちよつと僕に力を貸してくれないかな。」

ポーノは透明な檻から脱出するために、いろんな方法を試し始めました。ポーノの背中にバツタを乗せて、そこからバツタが高く跳んで、出口を開けようとしたり、チョウチョの背中にカマキリが乗って、チョウチョが出口の近くまで飛んだところを、カマキリが鎌で出口を押し開けようとしたり、いろんな方法に挑戦しました。でも、出口はうんとすんともいいません。教室に朝日が差し

込み始め、

「ほらね。やっぱり無理なんだよ……。」

バツタがつぶやき、ボーノもうなずきかけた瞬間でした。遠くからパタパタと足音が聞こえてきました。りゅうとが来たのではないかと、みんながひやひやしているのと、「おうい。キノボリトカゲくん、いるかな。」

声の主は、もちろんまさやです。

「集団登校をしている時に、りゅうとがキノボリトカゲを捕まえたって話しているのを聞いて、まさかと思ったんだ。昨日はいなかったし。バツタくんたちも今から家に戻してあげるね。ちよっと待ってて。」

ボーノがホッとして力が抜けている内に、バツタもカマキリもチョウチョもボーノもアカギの根元に戻してもうえました。まさやの横には、下を向くりゅうとがいます。

「転校してきたばかりだから、友だちがいなくて寂しかったんだ。だから、虫やキノボリトカゲを友だちにしようと思って。狭いところに閉じ込めてごめん。」

バツタたちは、その言葉を聞いて、にこっと笑うと家族のもとに帰っていききました。

さて、学校が昼休みになると、ボーノはいつものようにアカギの木陰にいます。秋の風が、ひゅっひゅっとしてボーノをくすぐりました。ふふふっと笑うボーノは、いつ

もより楽しそうに、にこにこしながら、まさやを待っています。